

刈谷城本丸跡全体整備計画

平成28年3月24日

目 次

- 1 . 本丸跡全体整備方針
- 2 . 遺構保存と全体整備レベル
 - 1) 遺構保存の方針
 - 2) 全体整備レベル
- 3 . 導入路および管理用道路の整備
 - 1) 導入路
 - 2) 管理用道路
- 4 . 復元石垣の仕様と石積み
 - 1) 仕様
 - 2) 石積み
- 5 . 土塁整備方針

1. 本丸跡全体整備方針

遺構の保護・保存を最優先とするとともに歴史や文化を学ぶ教育の場としての整備を行う。

刈谷城本丸曲輪が石垣と土塁で閉じられていた空間を感じられ、市民が親しむことのできる整備とする。

利活用の観点から、施設等を入れる場合は、景観を阻害せず、誤解を生じさせない仕様デザインとする。

復元及び本丸整備においては、維持・管理・防犯等に必要な施設・設備を設ける。



本丸跡全体整備イメージ平面図

2. 遺構保存と全体整備レベル

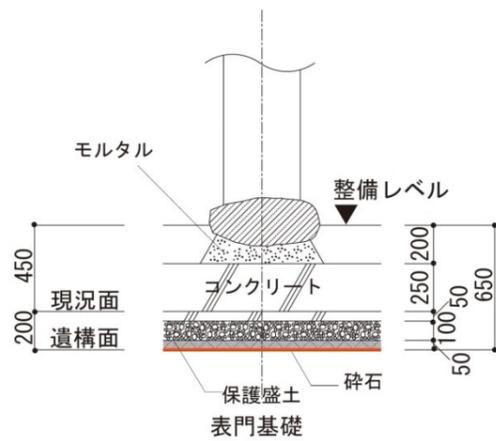
1) 遺構保存

整備にあたっては、整備に伴う工事等で遺構面が削平されないよう留意する必要がある。表門、裏門の柱の復元整備に際しては、遺構面に保存盛土を行い、遺構を保護した上で復元建造物等の基礎工事を行う方針とする。現状の地形や環境を極力活かしながら保存盛土を行うことを基本とし、保護盛土は必要最小限度にとどめる方針とする。

石垣については保護盛土上に石垣復元を行うと、石垣の荷重で地盤が沈下をおこす可能性が高いこと、遺構を保護しながら石垣の荷重に耐えるような地業を行うと、盛土高が1m以上になってしまうことから、地固め遺構をそのまま利用して石垣復元を行う方針とする。

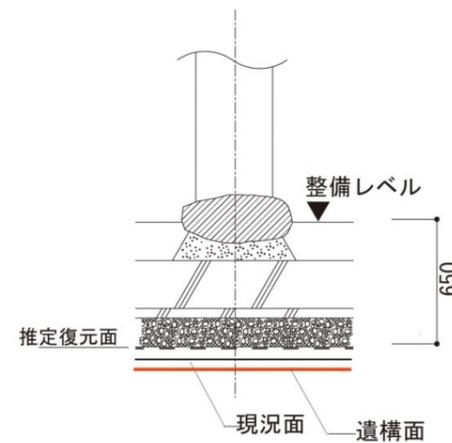
2) 全体整備レベル

遺構保存の方針を踏まえ、表門の北側東隅の柱跡で検討を行った結果、柱の復元のための地業には、最低でも遺構面 + 65 cm が必要なことが確認された。現状の遺構面は、後世の削平により江戸時代の生活面より地盤レベルが低くなっている箇所と、江戸時代とほぼ同じレベルの箇所があることが判明している。一方、石垣は江戸時代の生活面の地盤レベルを基準として築造されたことが想定される。このため、石垣と表門、裏門等の復元レベルの整合性を図るためには、想定される江戸時代の復元レベルを基準とする必要がある。モデルケースとなった表門北側東隅の柱跡の江戸時代の推定地盤面（生活面）の復元レベルは、8.2mであったことが、平成22年の発掘調査の土層断面の検討で確認されている。これに基づき、江戸時代の推定復元地盤レベルに65cmをプラスしたレベルを、整備レベルとして設定した。想定した整備レベルは次ページの図の通りである。なお石垣は遺構面を利用して復元を行うため、復元勾配にそのまま65cmをプラスすると、石垣天端の幅が狭まり、復元多門櫓の幅2間分が確保できなくなるため、根石に相当する第1石を調整して復元を行う方針とする。



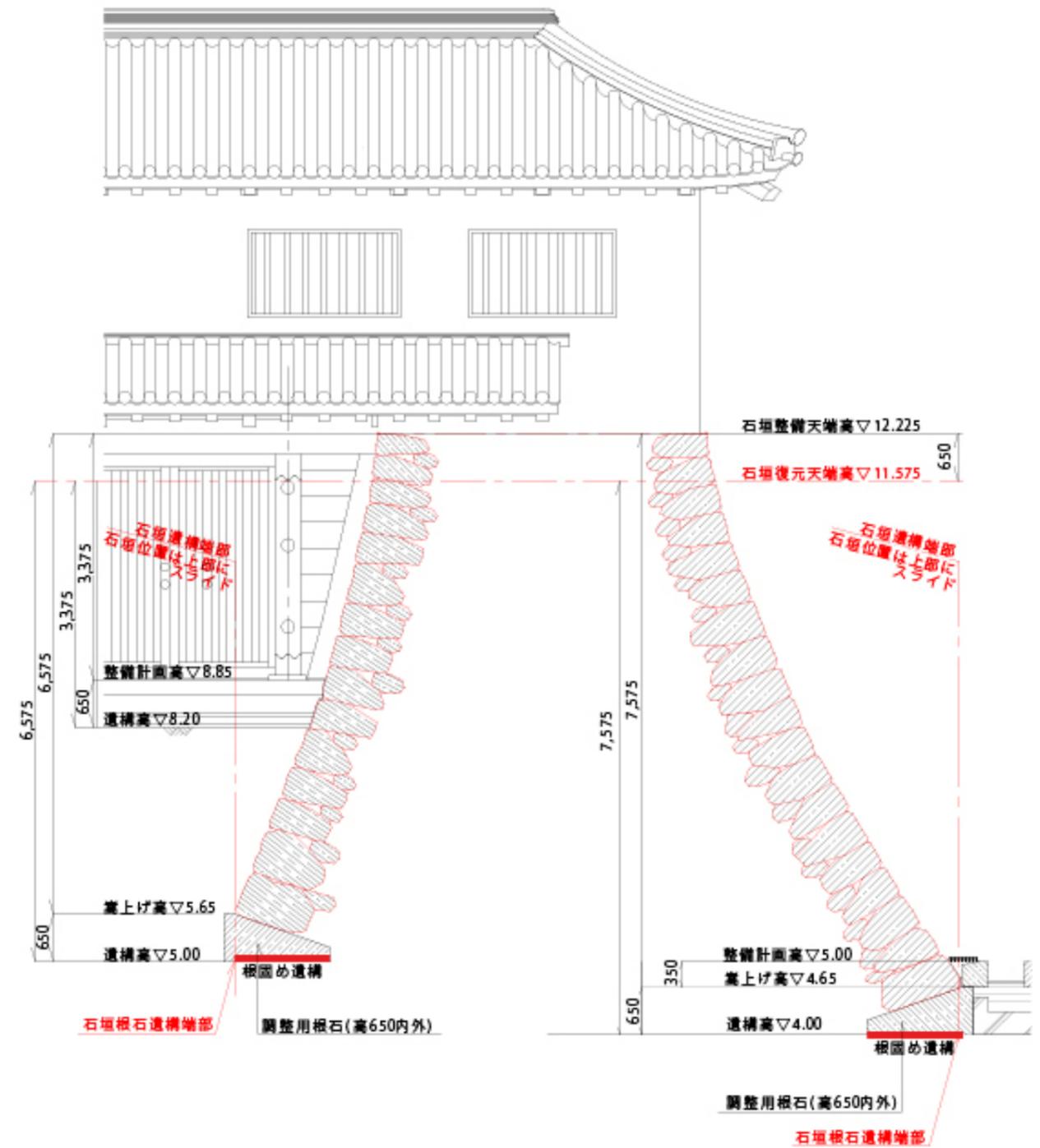
遺構保護盛土概念図

遺構に保護盛土を行った上で、基礎工事を行う
最低 65 cm 必要



整備レベル概念図

石垣と表門、裏門等の復元レベルとの整合性を
図るため、江戸時代の推定復元地盤面に 65 cm
プラスしたレベルを整備レベルとして設定



石垣保存概念図

整備レベル



参考 遺構面、現況面、想定復元レベルの比較



3. 導入路および管理用道路の整備

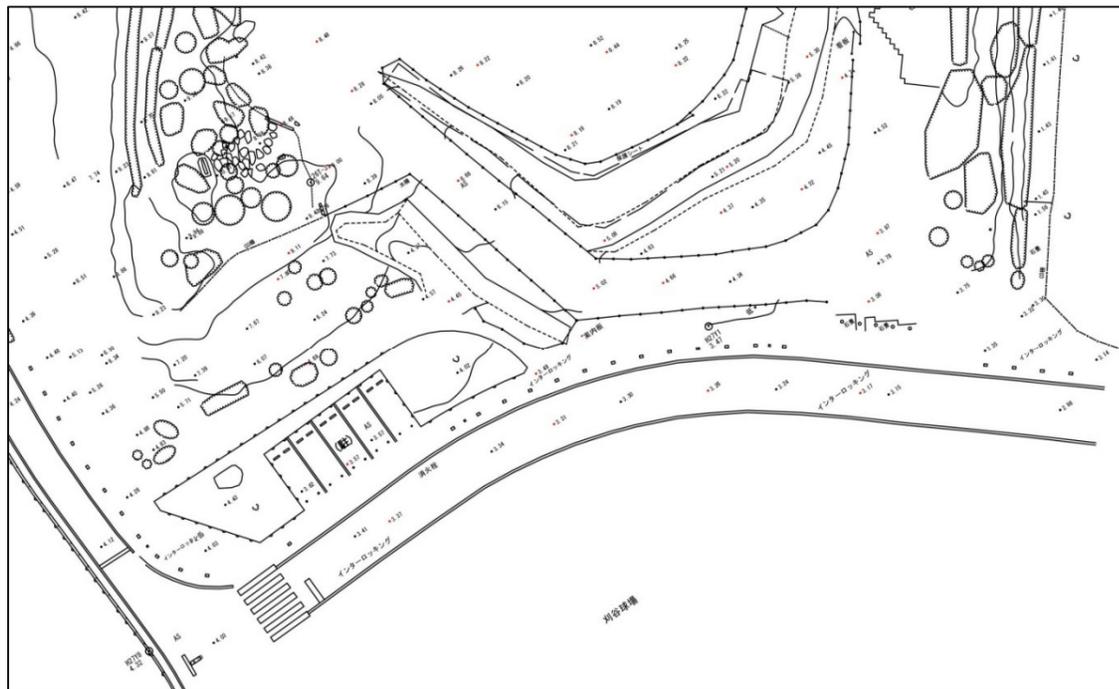
1) 導入路

表門の復元に伴い石垣や土塁の整備を行うと、既存の導入園路は入口付近で幅員が2m程度しか確保できなくなる。また、表門前全体の空間も導入空間として必要なスペースを確保することが難しい。このため、現況の表門前道路の車道を撤去し、車道部分を含めた空間を新たな導入空間とすることを検討した。主な概要は次の通りである。

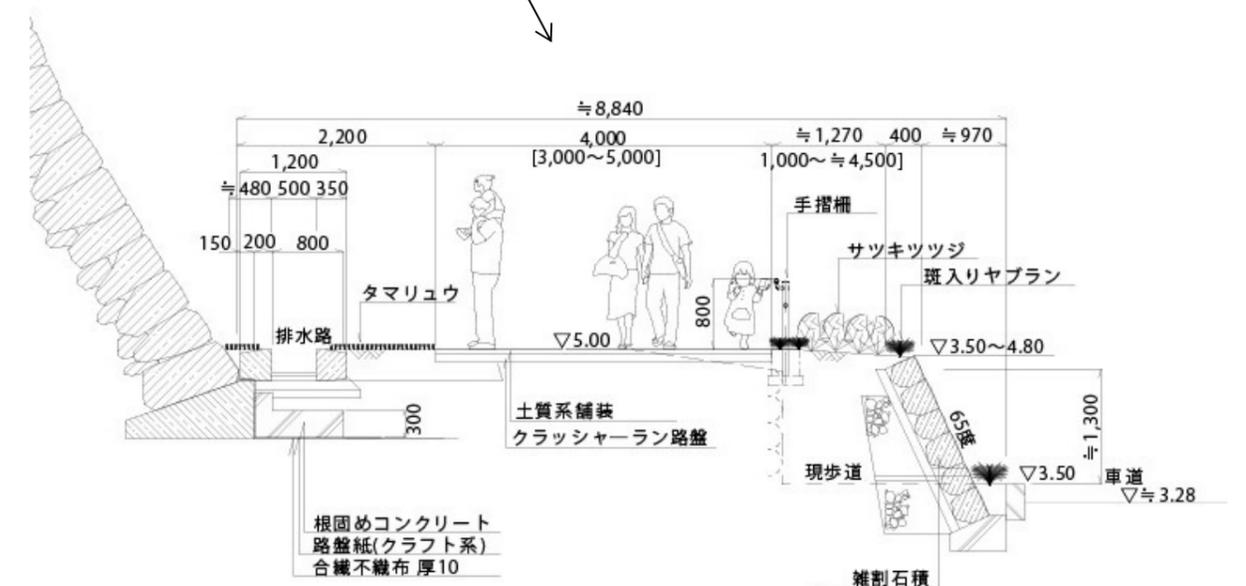
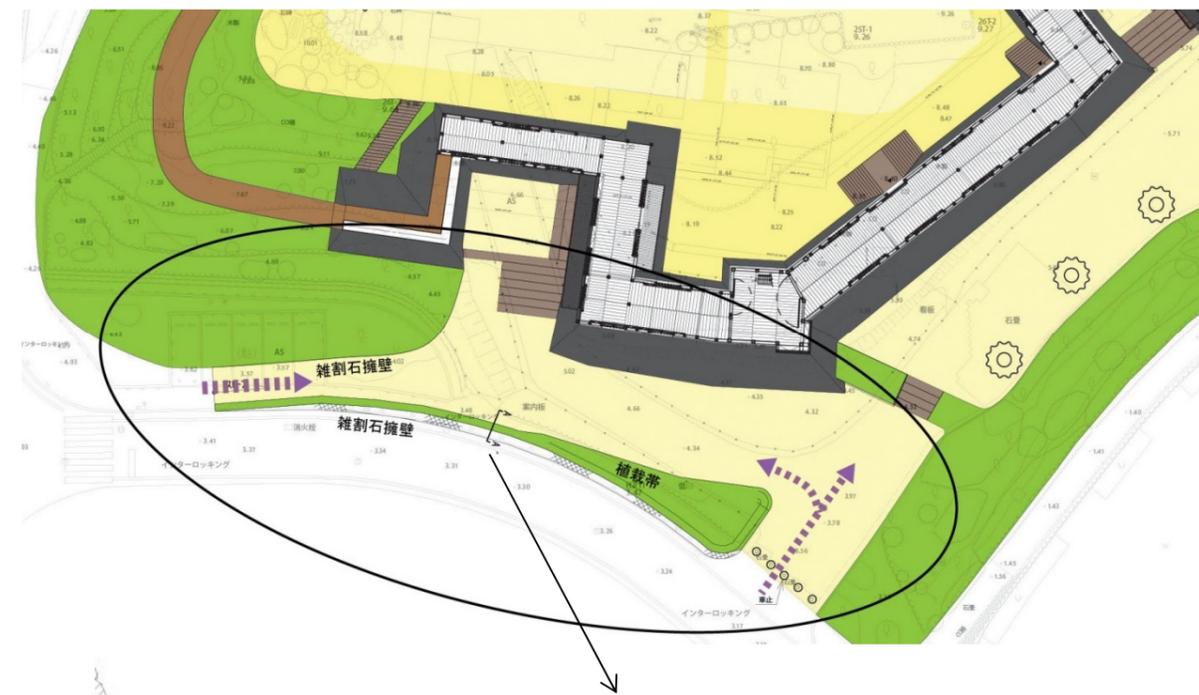
表門東側は現況の導入園路を撤去し、歩道部分を取り込んで一体的な空間とすることで導入空間としての広さを確保する。

西側は土塁復元の法尻が車道まで達するため、法尻を雑割石擁壁で押さえて、外周道路幅員を確保する。現況の駐車場は撤去する。

復元地盤整備レベルと車道との間に段差が生じるため、車道との間に雑割石擁壁を設ける。また、転落防止等の安全対策のため、植栽帯を設ける。

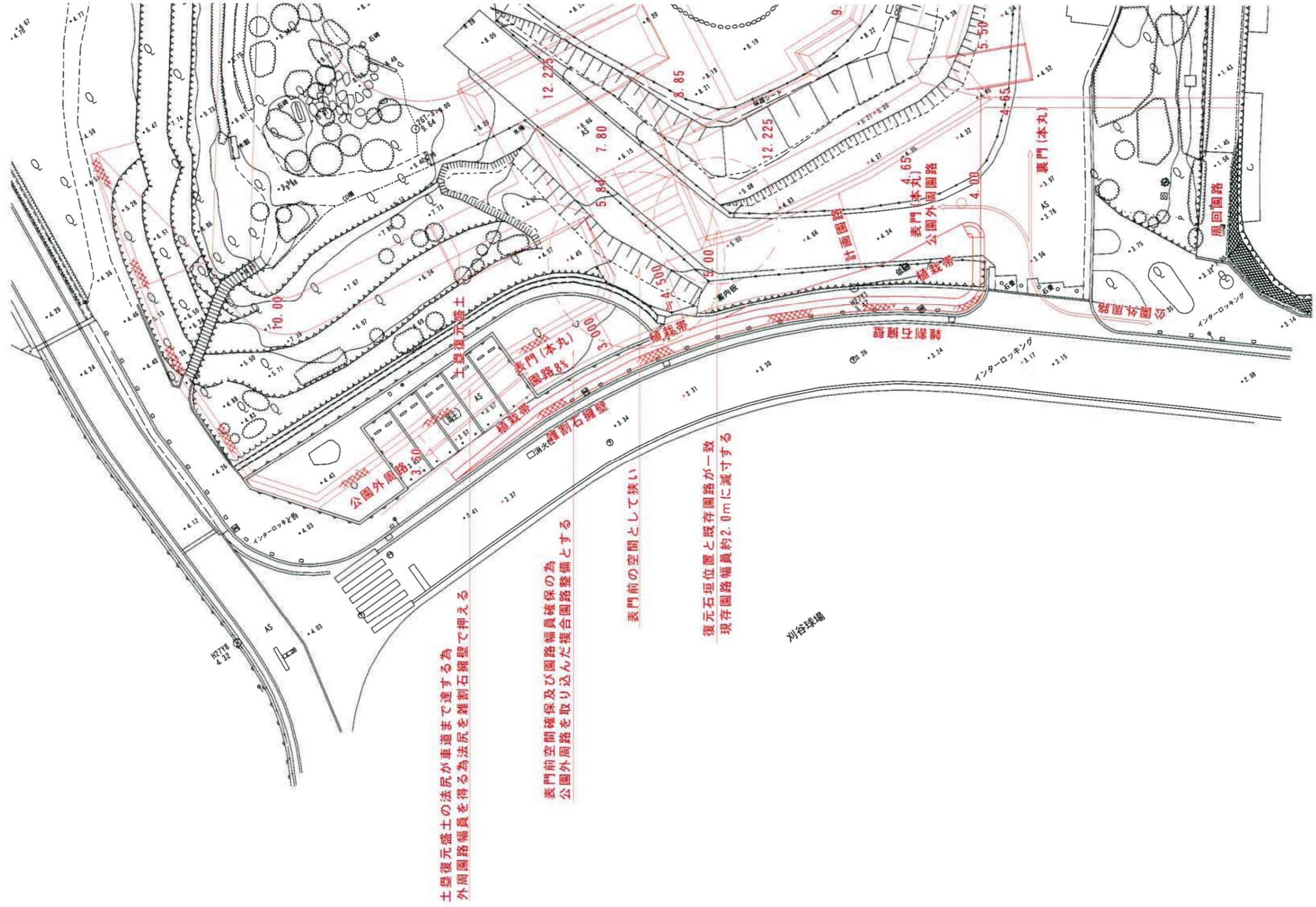


導入部分 現況



導入部分整備イメージ図

導入路 検討図



2) 管理用道路

刈谷城石垣整備及び建造物復元に伴い、作業進入路が野球場からの1方向しかなく、表門周辺整備及び裏門周辺整備時には分断されてしまう為、本丸内に進入できる導線が必要となる。また、表門、裏門とも、復元後は階段を登って本丸へ入る構造となるため、身障者対応のスロープや整備後の本丸内の維持管理のための管理用車両、緊急車両(救急車、消防車等)のための導入路も必要である。これらの機能を果たす管理用道路の設置について検討を行った。

与条件

- ・現状導線を確保し、現況地形及び既存園路等の改変が少ない計画とする。
- ・刈谷城の現存遺構を尊重し保全すべき遺構を維持した計画とする。

配置場所

- ・外周道路からの進入がし易い位置であること
- ・現存する土塁遺構に整備に伴う損傷が必要最低限で留める計画であること
- ・導線として利用しやすい位置であること。

以上の観点から、現在、土塁を切って本丸西側(河川側)からの登り口が設定されている十朋亭西側のルートに改修する計画とした。

幅員

現状では管理用車両として軽トラックが公園内に進入しているが、必要最小限として、救急車・身障者車両が入場できることを条件として、国土交通省が定める道路構造令の小型車幅1.7mを基準に、車両の軌跡を考慮し有効幅員3.0mとした。

勾配

身障者対応が可能で、限られたスペース内で配置できる勾配であることを前提に検討を行った結果12パーセント勾配とすることとした。(P9~P13参照)

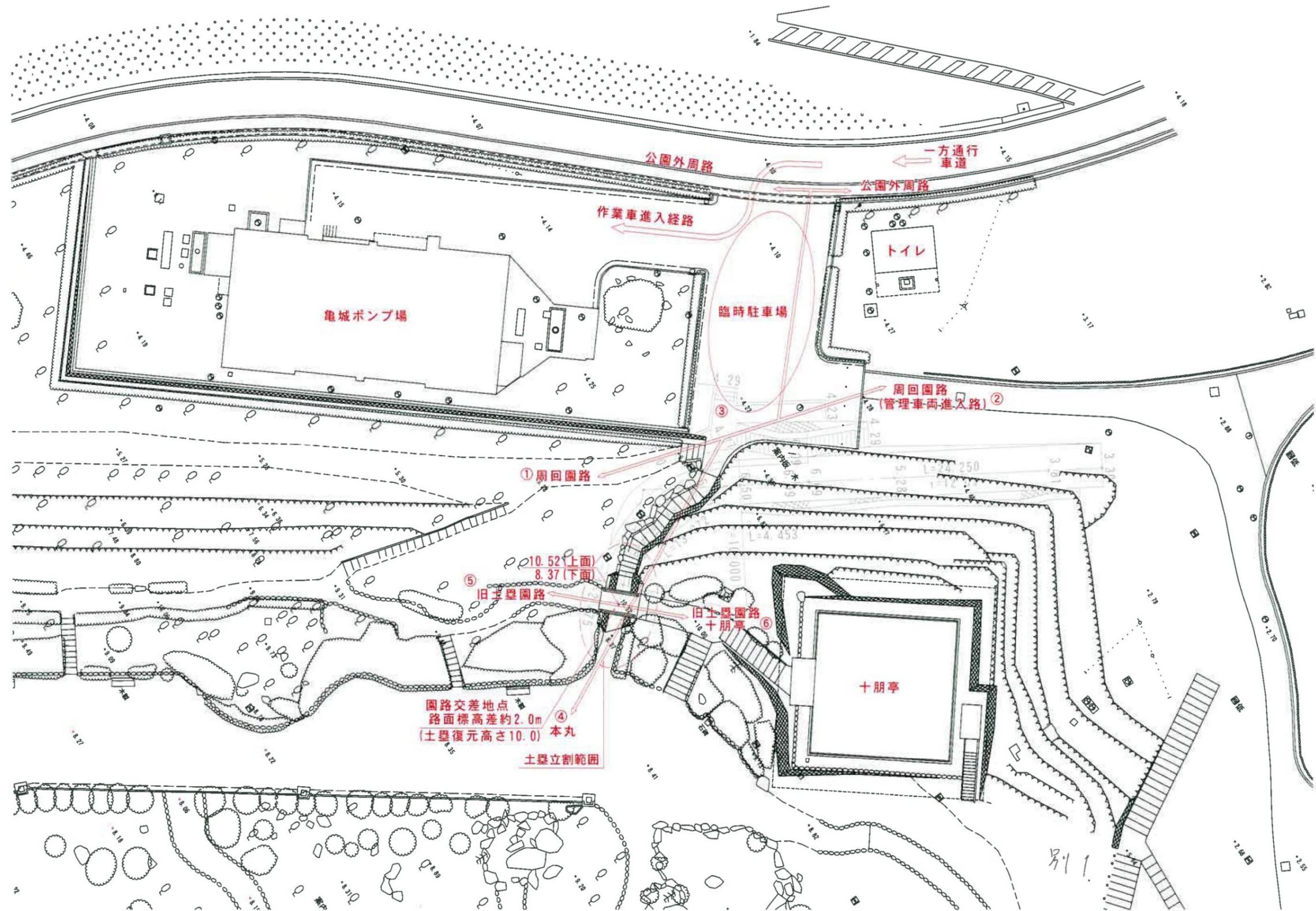
なお、現在は土塁断ち割り部に橋が架けられているが、小型車のみ限定車両で一般道路と異なる公園内園路とした場合でも道路構造令を基に2.9m以上の高さが必要となる。現状の整備計画地盤レベルで8.37mに2.9mを足すと11.27mとなり、橋桁や舗装厚を勘案すると約11.8mとなり、土塁推定復元高10mを大きく超えてしまうため橋は撤去し、代わりに十朋亭に登る園路を現在の階段からスロープへ改めて、バリアフリー対応を図ることとした。

また、既存の断ち割り部の擁壁解体時に発掘調査を行い、土塁の構築方法がわかるような版築遺構等が出土した場合は、新設擁壁面に土層剥ぎ取りや土層レプリカを展示することを検討する。

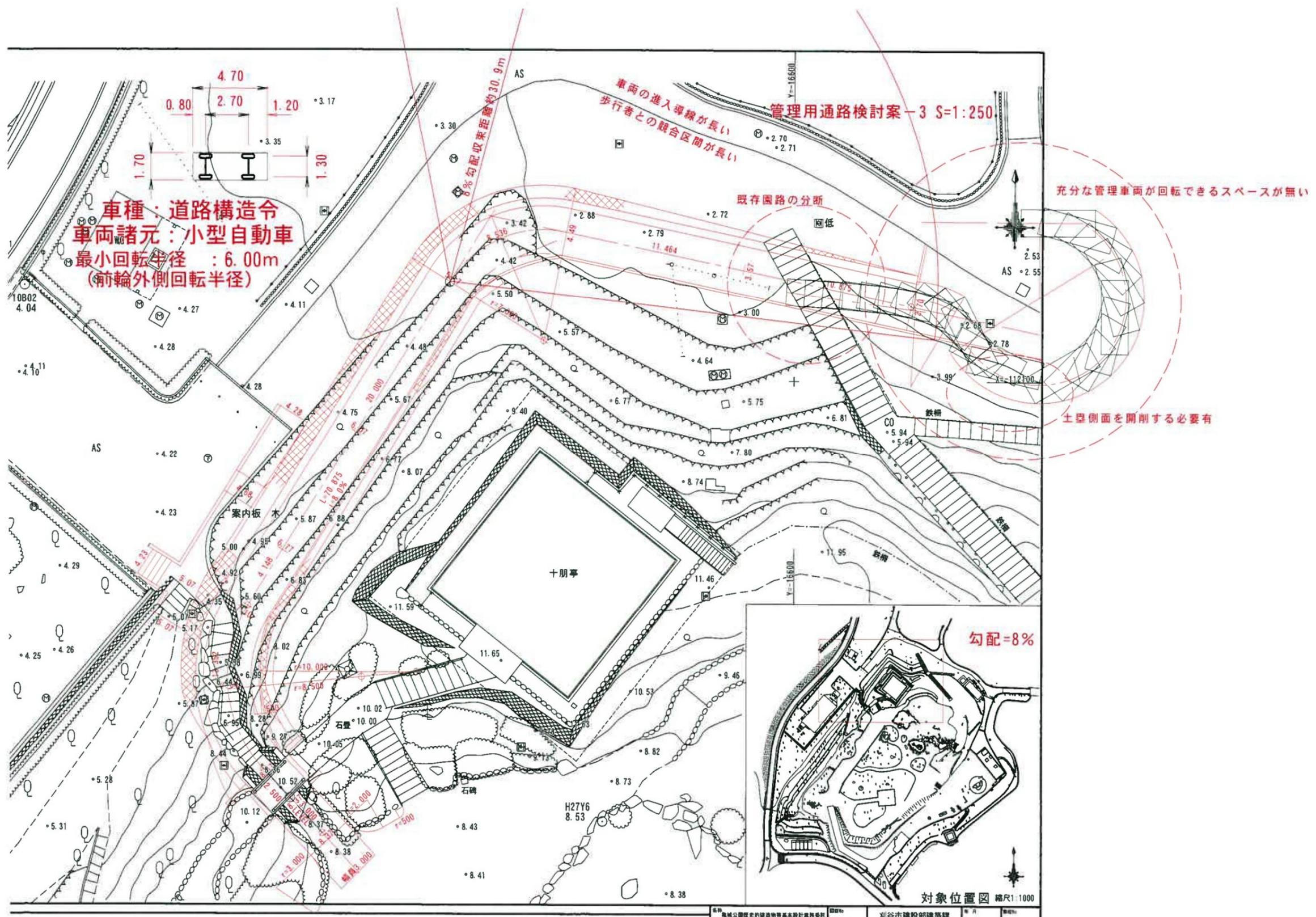
管理用道路 幅員 3.0m、勾配 12%



管理用道路 検討図 1 (配置検討現況)



管理用道路検討図5 (勾配8%)



4. 復元石垣の仕様と石積み

1) 仕様

石質

刈谷城本丸跡には石垣に使用されたとみられる石が、数石残存している。これらの石の石質は白系の花崗岩であり、幡豆石と考えられる。幡豆石は名古屋城の石垣の主要石材としても利用されており、これらの石材は愛知県蒲郡市と西尾市の三河湾および知多郡南知多町篠島で採掘されたことが報告されている(田口一男、鈴木和博「名古屋城の城郭に使用された石材の産地同定のための全岩化学分析 予報」『名古屋大学加速器質量分析計業績報告書』2015.03)。

刈谷城本丸跡の石垣復元に際しては、当時と同じ石質の石材を使用することを原則として、幡豆石の使用を第一に考えるが、石垣復元に適した形状の石材が必要量確保できるか現状では不明でありため、今後、産地の調査を行った上で最終的に決定する。

裏込石材

地固め遺構に使用されている石材や、発掘調査で出土した石材はいずれも河原石の玉石であるが、現在では入手が困難であるため、割栗石を使用する方針とする。

2) 石積

石垣の石積みについては、類例調査事例(熊本城、名古屋城、福山城)のうち、刈谷城本丸石垣と同じ幡豆石を使用している名古屋城石垣を参考とすることにした。名古屋城の石垣はその多くが後世に改修されているが、加藤清正が構築した天守台石垣の北東隅角部の下部～中程に、築城当初の石垣が残されていることが知られている。当該部分の石積みの概要は以下の通りである。

築石部

打ち込み接ぎの手法を用いて構築されている。割石を用いているが石面調整の度合いは高くない。大きさはほぼ整っているが、形状は不揃いであり、石材と石材の間には間詰の石を詰めている。

隅角部

左右に引きの長い石材を用いて、長短の面を交互に組み合わせる「算木積み」と呼ばれる石組みである。角石の形状は石尻がややすぼまり、未整形である。

復元にあたってはこれを参考にすが、今後、実施に向けてさらに検討を行う。



刈谷城本丸跡出土の石垣石材



名古屋城天守台北東隅角部石垣に石積み

5. 土塁整備方針

刈谷城本丸の土塁は十朋亭と表門を結ぶ部分（西側土塁）は江戸時代の高さや形状を比較的好く残していると考えられるが、十朋亭と裏門を結ぶ部分（東側土塁）は大きく削平されている箇所が多い。

本丸石垣および建造物の復元整備に伴って、表門および裏門の取り付け部はそれぞれの復元レベルに合わせて整備を行う、その他の部分については、現状の天端高を活かして土塁上を周回路として利用できるようにする。

また、土塁法面や土塁前面の樹木は伐採し、土塁の形状が視認できるようにして、石垣と土塁で囲まれた本丸の空間的特徴を示せるようにする。



土塁復元断面図 S=1:50

